



緊急連載

森哲志の

W杯異聞 1

かつて暗黒大陸とまでいわれたアフリカでの初のサッカー「WORLD CUP 2010」。日本人にとって地球上で最も疎遠な地で、日本代表のこの活躍を、どれだけの人が想像できただろう。初戦の勝利で第3戦まで心ゆくまでしっかりと応援できる。頑張れサムライ・ジャパン！ W杯の話題を現地から伝えます。

対決色ない交歓風景



戦場と祭りの現場が同居して、何かが生まれるところに、サッカーの醍醐味がある。そうした意味で、6月14日の対カメルーン戦は、素晴らしく意義深い試合だった。試合開始(午後4時)の2時間前なのに、両国サポーターがフリーステートスタジアムに勢揃いした。場に刺々しさが無い。対決色も緊張感もない。肩を寄せ合って記念のショット。両国の国旗を振りかざし、フフゼラ(筒型の笛)を鳴らし合って、まるでパーティー会場だ。大分県の小さな村が8

年前に播いたタネが健康やかに育った気ささする。'06年ドイツ大会の対豪州戦では、こんなムードは無く、会場もそれほど盛り上がりなかった。サポーターは圧倒的にアフリカ勢が多く、完全にaWay状態。カメルーン人より南ア人が目立ち、入場者3万人も想定外。南ア人は、応援というより、フフゼラで盛り上げ役に徹した感じだ。日本代表のこの日のサッカー、「岡ちゃんの猫っかぶ



これから戦うとは思えぬほど和やかな日・カメ兩サポーター



フフゼラの大音響で開幕



W杯の開幕ベルは、フフゼラだった。大人の手の長さほどの筒型の笛。日本人が聞くことだの騒音だが、現地の人達にとっては、心地よいトランペット。テレビのボリュームなども最高音量で聞くほどののだ。11日午後2時、開会式直前のヨハネスブルグ・サッカーシティ(スタジアム)は真っ黄色に染ま

「奇跡の勝利」サポーターは歓喜の涙だ。「ヨハネスブルグでマリファナ吸って銃を持った男がふらついていた。怖い思いをしてやってきた甲斐があった」と横浜の男性。「ダラエスサラームで強盗に遭って、文無しに。同宿の人に借金して応援に来ただけに、感無量」と埼玉・越谷の大王。帰国便をキャンセルしたサポーターも多かった。スタジアムに燃えさがる印象。貧困大陸に救いの手を――FIFA(国際サッカー連盟)が呼びかけるのと、「アフリカは一つ」と地元のスマ・南ア大統領が呼応する。その熱い思いが、フフゼラの大音響に象徴されているのだ。フォール君(14歳)は、サッカーシティ近く、SOWETO(タウンシッ



甲斐あってカメルーンに快勝 熱烈サポーターの応援

プリアバルヘイト時代、政府が区分した旧黒人居住区)に両親と3人の兄弟と住んでいる。電気も水道もないバラック建てのスラムもあるが、父は建設労働者として3300ランド(4万円)の所得がある。地元オーランド・パイレーツの大ファン。無理を承知の上で、父にW杯チケット(最安値14000円)をねだった。代わりに父はイローのフフゼラを買ってきてくれた。25ランド(300円)。南ア代表のユニフォームと同じ黄色だ。開幕日、それを持って、スタジアムに走った。試合中、鳴らし続けた。スタジアムがどよめくたびに哀しく、喉に力を籠めた。中高所得の黒人層しか入れない。W杯に狂乱したくとも、お金がなくて見られない。フフゼラは、そんな人々の嘆きの音色でもある。



もりてつし/1943年長崎生まれ。稲城市在住。作家。日本エッセイスト・クラブ会員。朝日カルチャーセンター講師(エッセイ講座=立川)。元朝日新聞社社会部記者。市井の人々の人生を描くエッセー、国内外ルポ・ノンフィクション作品を発表。現役時代は事件記者。定年後、25ヶ国を1年間旅した紀行が『団塊諸君 一人旅はいいぞ!』(朝日新聞社)。イラク、アフガン、パレスチナ、シルクロード、アフリカも取材。最新刊『男は運路に立ち向かえ』(長崎出版)発売中。http://www.mori-tetsu.com